

2022年(令和4年)

4月例会

日時：4月16日(土)14時より

講師：東京外国語大学 西原大輔

題目：能《白楽天》《放生川》《呉服》《唐船》を読む
——室町時代の日明外交と能狂言——

司会：東京工業大学 劉岸偉

5月例会

日時：5月21日(土)14時より

講師：東京大学(特任研究員)宮田沙織

題目：近代日本における小品ジャンルの生成
——水野葉舟と青年投書雑誌『文庫』を中心に——

司会：東海大学 堀啓子

INSIDE THIS ISSUE

1. 4月・5月例会案内(オンライン開催)
2. 例会要旨等
3. 東京支部短信

役員連絡会開催のお知らせ

2022年4月の例会前ならびに5月例会終了後、オンラインにて開催します。4月の開催時間は、のちほど連絡いたします。

(役員連絡会の構成員は支部長、事務局長、会計を含む事務局委員、各種委員会委員長です。委員会の委員、幹事は含まれませんが、陪席を歓迎します)

4 月 例 会 発 表 要 旨

能《白楽天》《放生川》《呉服》《唐船》を読む ——室町時代の日明外交と能狂言——

東京外国語大学 西原 大輔

2021年10月に出版した拙著『室町時代の日明外交と能狂言』（笠間書院）に基づき、4曲の能狂言を、中世東アジアの国際情勢の中で論じたい。

従来、能狂言は優雅な伝統芸能であり、政治とは無関係なものと考えられてきた。これに一石を投じたのが、天野文雄『世阿弥がいた場所』（ペリカン社、2007年）である。この研究書によれば、能作者世阿弥は、パトロンたる将軍の慶事などに合わせて能を制作し、高度な比喻で権力者を礼賛している。

たとえば《弓八幡（ゆみやわた）》は、足利義満による南北朝合一を賛美した作品である。《難波》は、足利義持の家督継承の祝賀曲である。あるいは《金札（きんさつ）》は、室町幕府の「花の御所」落成を祝う能であった。天野文雄氏の問題提起を受けて、この発表では、《白楽天》《放生川》《呉服》《唐船》を、室町時代当時の東アジアの外交とのかかわりで論じてゆく。

国力に自信をつけた明朝の永楽帝は、1419（応永26）年、使者呂淵を日本に再派遣し、軍事侵攻を示唆して、4代将軍足利義持に服従を要求した。義持はこれを断固拒否し、使者呂淵を追い返した。この一連の外交交渉を寓意とした曲が、能《白楽天》と考えられる。また同年、倭寇に悩まされていた朝鮮王朝は、明国の対日強硬姿勢に乗じ、対馬に侵攻した。応永の外寇である。朝鮮軍はまもなく退却したが、この異国撃退の祝賀曲が能《放生川（ほうじょうがかわ）》と解釈できる。

一方、1428（正長元）年の義持没後、六代将軍足利義教は、断絶した日明関係を修復し、経済回復のきっかけをつかもうとした。義教のこの遣明船派遣再開計画を賛美したのが、能《呉服（くれは）》及び《唐船（とうせん）》と考えられる。

世阿弥ら能作者が、同時代の政治に深くかかわりながら曲を書いていた事実には、驚くべきものがある。まだ緒についたばかりの研究の一端を発表させていただきたい。

5 月 例 会 発 表 要 旨

近代日本における小品ジャンルの生成 —水野葉舟と青年投書雑誌『文庫』を中心に—

東京大学（特任研究員） 宮田 沙織

本発表では、明治末年から大正初年にかけて流行した詩的散文のジャンルである「小品／小品文」が、伝統的な詩歌・散文ジャンルの解体や西洋からの散文詩ジャンルの移入を背景に、青年投書雑誌から生成した形態であることを論じる。

「小品／小品文」という呼称自体は古くから存在した。それが明治 40 年代に突如、新しい文芸ジャンルとして注目を集めた。水野葉舟（1883～1947）はこのジャンルの流行の中心にあった作家で、瞬間の印象を表現する感覚的描写の巧みさで知られた。しばしば小品作家とも呼ばれた彼は、しかしながら、自身の作品にこのジャンル区分が与えられることにあまり積極的な意味を見出してはいなかった。自分の未熟な作品を散文詩と呼ぶのは憚られたので、ちょっとしたものという意味で小品と呼んだに過ぎないとも述べている。特に「小品文」という呼称には明確に拒絶を示し、小品文ではなく小品と、「文」を取り去ることにこだわった。

本発表では、「小品／小品文」の流行と関係の深い人物や出版社が、青年投書雑誌の投書家・記者・発行元と重なることに着目する。青年投書雑誌は詩歌や小説そして様々な「文」の投稿媒体である。翻訳作品の投稿も多く、文体の混交や詩情のジャンル横断が盛んに試みられた。「小品／小品文」が、このような投稿媒体であった青年投書雑誌からどのようにして生まれ、どのようにして新しい芸術の形態として取り出されるに至ったのか。その過程を追うことで、この文体の誕生が「文」の時代の終焉を体現するものであることを示す。また新体詩と呼ばれたものが、ただの「詩」となり、口語自由詩が生まれる過程との関係も、明らかになる。

葉舟のいくつかの小品にはツルゲーネフ『散文詩』からの影響が見てとれる。また明代文人のスタイルとしての小品文を近代の文芸ジャンルとして再生する機運が高まりつつあった 1920 年代の中国で、葉舟の小品「深夜」が翻訳されてもいる。本発表では、西洋の散文詩や中国の小品文との関係も視野に入れながら、「小品／小品文」の流行が近代日本の文学の形成に果たした役割を明らかにする。

東京支部短 信

第 60 回東京支部大会はオンライン開催です

3月19日（土）に開催された幹事会において、第60回東京支部大会については、対面開催のための会場の目途が立たないため、オンラインで開催することとなりました。開催日は10月15日（土）となります。

第 60 回東京支部大会研究発表者募集

2022年10月15日（土）に第60回東京支部大会が開催されます（オンライン開催）。研究発表を希望される方は、氏名、住所・連絡先（電子メールアドレス）、所属、発表題目、400～600字程度の発表要旨をメール添付で、6月10日（金）必着で事務局（minamoto@waseda.jp）までお送りください。発表時間は25分、質疑応答が10分です。なお、申し込み受付の返信をお送りしますので、ご確認ください。

当面の例会運営に関するお知らせ

- ①例会開催の概要は、これまで印刷物のニューズレターで年2回、3月と9月にお知らせしてきましたが、今後は、**年4回に分けてホームページに情報を掲載する予定**です。3月に4月、5月分の、5月に7月、9月分、9月に11月、12月分、さらに11月には翌年1月、3月分の例会情報（日時、発表者名および題目、要旨）を掲載します。
- ②オンラインによる例会開催については、当面、以下のように連絡する予定です。該当月の例会開催日の1週間前に、支部会員向け一斉メールで、開催内容（ホームページ掲載と同様）とともに、当日 Zoom に入室するための URL を送付します。その際、ホームページにも、会員に入室用 URL を送付した旨を掲載しますので、メール不着の場合は事務局にご連絡ください。
- ③例会開催時は、従来配付していた発表者の資料は、画面共有で見えることを基本とします。発表を希望される方は、パワーポイントやワードなどで、当日の資料を作成することをご了解ください。なお、資料は、発表原稿そのものではないものとします。また、発表者は、音声のみの参加ではなく、カメラ使用を基本とします。
- ④Zoom への入室は、メールで送付された入室用 URL をクリックすれば可能です。当日の参加に際しては、発表中はカメラ・音声をオフにさせていただきます。

月例会発表者募集

支部月例会の発表者を募集しています。申し込みは支部事務局（minamoto@waseda.jp）に氏名、所属、題目、連絡先（メールアドレス、電話）を明記したうえで、600～800字の要旨を添えて電子メールで送信、または郵送でお願いいたします。支部役員に託されても結構です。発表時間は45分（質疑応答を除く）です。

東京支部事務局より「お知らせ」の配信について

東京支部では支部会員みなさまにメールマガジンの「お知らせ」をお届けしています。原則として毎月1日発行で、例会や支部大会などの情報を掲載しています。これまでお手元に届いていない方は、日本比較文学会東京支部の支部会員のページの「お知らせ」のウェブサイト（<https://www.hikakutokyo.com/mm>）のフォームにご記入のうえ「配信希望」をクリックして下さい。メールアドレス変更の場合も、お手数ですが、新アドレスで再登録をお願いします。

日本比較文学会東京支部ニューズレター 133号

発行人：佐藤 宗子
編集委員会（編集担当）
委員長：椎名 正博
委員：鈴木 美穂 堀江 秀史 安元 隆子 庄子 ひとみ
事務局
事務局長：源 貴志 会計担当：南平 かおり
事務局委員：川野 礼音 小泉 泉 土田 久美子
芳賀 理彦 畑中 健二 蒔田 裕美

JCLA

日本比較文学会東京支部

事務局住所
〒162-8644
東京都新宿区戸山 1-24-1
早稲田大学 文学学術院
源 貴志研究室
TEL：03-5286-3725